

論 說

建 國 の 大 精 神

皇道國體の先天絶對性

田 崎 仁 義

此一篇は大正十五年二月十日——紀元節前夜——三菱長崎造船所職工俱樂部に於て「吾人の第一原理は大日本帝國これ也」の題下にて講演したる草稿の一部分を修訂したるものなれば、其文體用語等は力めて平易通俗を期し且つ反覆説明せる點もあり、又た新造語を用ひたる個所等もあり。鑒め讀者の諒を乞はむと欲する所なり。

一

大正十五年二月十一日、神武天皇即位紀元二千五百八十六年の紀元節、即ち建國紀念の佳節に當りて、吾人は恭しく我が大日本帝國の建國を回顧するのである。

本年の紀元節には東京を始め諸地方に於て建國祭が催されて居るのである

が、別に建國祭などと號するを俟たずして、紀元節の其日に、建國の精神意義を宣明する爲めに催事をするのは結構な事であるは申すまでもなく、又た建國祭の名を付けて之を行ふことも、敢て差支へないのみならず、國民の反始愛國の誠意感激の發露である以上は、是れ亦た甚だ結構な事である。一部の人は「ナクモガナ」など、冷眼視して居るものもあるかに傳聞いたけれども、斯かる意味の事に對して何の彼のと狹まい事を言ふには當るまい。私は斯かる事が益々健實盛大に行はるゝに至ることを衷心から喜ばしく祝す可き世態であると感じるものである。

西洋諸國は、其の紀年法に、概ね耶蘇紀元を使用して居るが、是は主として宗教的意味から起つたもので、政治的にも社會的にも關係があるのではなく、國家的にも國民的にも全く無意味のものである。只だ西洋諸國が、歴史的に共通に用ひ來つたと云ふことから、實用的に便利であると云ふに止まる。

支那には黃帝の即位を以て、其の建國紀元としやうと云ふ議論、民國創立の際に起つたことがあつたが、其によれば、武漢に革命軍の起つた明治四十四年が、其の四千六百九年であると云ふのであつたから、今年は即ち黃帝紀元四千六百二

十五年に當る譯であるが、彼の如く易姓革命の國柄でもあり、又た黃帝が君主國體を創めた紀元を、今の民主國體の中華民國で尊重すると云ふことも、甚だ異様にも考へられる。さりとて漢民族の支那に於ける發祥紀元といふ譯のものであるから、深き意義を以て其の國家國民の念頭に置かれるには適當であるとは言はれまい。現に國民一般として大に之を紀念する様な運動行事の存しないのは、其の何よりの證據ではあるまいか。然りとすれば、民國の建國紀念日は、今より十五年前の革命の紀念日たる十月十日の外には無い。まことに新しいものである。

佛蘭西共和國は七月十四日、北米合衆國は七月四日、獨逸共和國は十一月九日、ソヴェット社會主義共和聯邦國は十月七日、ポーランド共和國は五月三日、アルゼンチン共和國は五月廿五日、ペルー共和國は七月廿八日、スイス共和國は八月一日、ボリヴィア共和國は八月六日、メキシコ共和國は九月十六日、チリ共和國は九月十八日、ブラジル合衆國は十一月十五日が、各其の獨立又は共和の宣言等を記念する國祭日であるので、其の意義は一樣ではないが、中に就き、共和の紀念日は、單に政治上、即ち政體改革の上に於て、大なる意義があるけれども、獨立紀念

程に國家國民生活の上に根本的の意義ありとは言ひ難いものであるかと思ふ。此點から言へば、米國の七月四日の獨立祭等は、比較的意義は重いと云ふ可きものであつて、彼國に於て、此の日を以て全國舉て盛大なる紀念祭を行ふのも當然と思はれる。然し是を我國の紀元に比すれば勿論其の趣も異つて居り、年代も浅いものであつて、到底之に比儔するに足らないと思ふ。

斯く考ふれば、我國の建國紀念日たる紀元節は、事實世界に類例のない重大善美なる意義を有つて居るものであると言はねばならないのである。然るに我國人にして此の重大なる紀元節の意義を、尙ほ充分に理解して居らぬものがありはせぬか、それ程大切に感じて居らぬものがありはせぬか。尤も是は良い空氣中に居りて其の空氣が大切なることに特に氣が付かない如く、餘りに親しい爲めに、特に之に氣が付かないのであるかも知れぬが、然し、斯る大切な事は、時々深く氣を付ける機會を有て居ないと、知らず識らずにどんなでもない間違つた事をする様にならぬとも限らないかと思ふのである。私が米國に留學して居つた時の事、同じく留學して居つた同胞の一人、平常私とは特に懇意にして居つた友人の某吾が、私と書信の交換をするに際して、其の日附を何時でも千九百十何

年何月何日と、西暦を用ひて來るのに私が氣付いた、私は是を甚だ可笑しいと思つた、西暦を奉じて居る外國人との間に交換する書信ならば、まだしも、雙方共に日本人でありながら、西暦を用ふる必要はあるまい。日本には日本國民として尊重す可き大正と云ふ年號がある。此の大正なる年號を用ふるとは、取りも直さず、吾々が、萬世一系の皇統を紹がせられて皇位に在らせらるゝ、今上天皇の赤子である、臣民である、大御寶オホミタカラであると云ふ、貴く誇る可き國民たるの證據であるのである。世界のあらゆる他の國民が有つことの出来ない所の、大日本帝國臣民のみの特權であるのである。吾々日本皇國臣民の國民的光榮であり、國民的自尊心の一つの大なる象徵であるのである。其の光榮ある特權を自ら放棄して、他の國民が、便宜上から又は宗教上から用いて居るものを借用すると云ふことは、甚だ怪しかる行爲である。其の居る所の内國たり、外國たるに拘らず、吾々はお互に名譽光榮ある皇國臣民である、大正何年何月何日と云ふ日付を用ふるのが當然であり必要であるのみならず、何等の不便、不利益もないのに、何を苦んで之が使用を放棄するか、事は些細の如くであるが、其の精神意義は決して淺小ではなく、敢て等閑に附す可きではない。私は平素より其の友人と親密なる

交際をして居り、深く敬愛して居つたのであつたから、一層その心得の誤れることに就て強く感じ、嚴しく之を忠告したことがあつたが、然るに近頃は、此に類した誤謬に陥て居る人が餘り少ない様である。有力なる學術雜誌や評論雜誌などに、論説を發表する様な智識階級の中にも、有數の學者や識者が、其の論文を認め終つた日附などを附記する場合に、西曆を用ひて居る者が屢々見受けられるので、私は甚だ其の意を得ぬと思ふのである。彼等は別に深く斯かる事に意も留めずして、且つ其の時の便宜にヒョット書いて居るのであるかも知れないが、其にしても不注意の事であると言はねばならぬ。何故大正何年月日と日付を書かないか、若しも其の時代々々に變る年號では不便であると云ふならば、何故神武紀元を書かぬのであるか。若しも其を主として外國人に見せる目的で書いたのであるとせば、一應の理由も立つであらうけれども、其の論説の性質上必ずしも左様に認められないものも、西曆で書いてあるのが少くない。是は私の希望としては吾々國民として注意したいと思ふのである。斯様な考へから、私は念の爲と思ふて、我國と外國との間に締結した通商航海條約や、國際條約の日附が、どんな風になつて居るかと調べて見た所が、少しく意外の事實を發見

したので、聊か不本意に感じて居るのである。即ち其の日附の書方に、一定の標準がなく、甚だ不統一にして、明かに不適當と認む可きものがあるかと思ふ。今其の各種の日附を左に列舉して見よう。即ち條約締結兩當事國全權の署名の日附には次の如き種類がある。

我國と朝鮮との條約には

- (イ) 大日本紀元何年月日、と、大韓國開國何年月日とを併記せるもの
- (ロ) 大日本國明治何年月日、と、大韓國開國何年月日とを併記せるもの
- (ハ) 明治何年月日
と、光武何年月日とを併記せるもの
- 支那との條約には

- (ニ) 明治何年月日
即光緒何年月日と記せるもの
- (ホ) 明治何年月日
と、光緒何年月日とを併記せるもの
- (ヘ) 大正何年月日
即中華民國何年月日と記せるもの
- 英國其の他の歐米諸國との條約には

- (ト) 日本明治何年月日
と、西曆何年月日とを併記せるもの
- (チ) 明治何年月日
と、西曆何年月日とを併記せるもの

(リ) 西暦何年月日 卽明治何年月日と記せるもの

(ヌ) 西暦何年月日のみを記せるもの

萬國條約には

(ル) 西暦のみを記せるもの

然るに各條約共其の批准の日附はどうかとなつて居るかを見ると、實に畏つたものである。

朕大正(又は明治)何年月日……(場所)ニ於テ帝國全權委員ノ(相手國)……一
國ノ場合モ數國ノ場合モ全權委員ト署名調印シタル……條約ヲ閱覽點檢
シ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇卽位紀元何年月日、大正(又ハ明治)何年月日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ
署シ璽ヲ鈴セシム

と必ず一定して記されて居るのである。

我國民は之を一見して果して如何の感があるか、私の考ふる所によれば、萬國
條約の場合に於ては、西暦のみを記するに止めると云ふ事は、便宜に由つたので
あると言ふても、相當に強き意味があると思ふけれども、我國と他の一國との間

の條約に、西曆のみを記したる、前記例の(ヌ)の如きは、明白に不適當なる日附の書き方であると信ずるものである。而して此の方式によつたものが、條約の數にするに相當に多くあると云ふことは、實に大なる遺憾を感ずるものである。斯かる重大なる文書の日附は、決して等閑に付す可きものではない。國家的自尊心が當然表示せらるゝ丈の形式を以てせなければならぬ。私の信ずる所を以てすれば、我國の全權委員の署名の上には、神武天皇即位紀元何年月日即ち明治又は大正何年月日と記することが最も正式である。尤も相手國が、光武とか光緒とか云ふ様な年號を用ひて居る場合は、我も之に對して明治とか大正とかの年號による日附を以てすることは、敢て不可はないと云ひ得るかも知れないが、然し、陛下の御批准の日附が終始一定せられて居ると前記の如くであることは、實に畏いことであると私は感激して居るものである。私は此の光榮ある建國紀元を回顧するに當りて、我同胞國民が深く思を此の點に留めて、うつかり西曆などを用ひて居つたことの誤れることを悟り、改めて神武天皇即位紀元又は、今上天皇治下の年號によりて、其の日附を記することにしたものであると思ふものである。只だ實地の便宜によらなければならぬ必要のある場合

は、西曆を用ふることも必ずしも排斥す可きではないであらう。其れによりて大日本帝國國民たるの國民的自尊心、國民的見識を傷ける様な形式をとらない様に注意したいと云ふのが、吾人の主張する趣旨であることを茲に明白に申して置くのである。

二

前述の如く我國の建國紀元は、全く世界に類例のない者であつて、革命紀念日や獨立祭の如く、其の裏面には種々なる壓制、反抗、戰亂等の如き陰愁殺伐なる意味を含んで居るものとは異り、眞に目出度い國家建立の紀念日であり、且つ其の年代に於ても、他に比類のない程悠久なるものである、現在世界の主要國で其建國の最も古いのが英國であるが、其は未だ二百餘年を経たるに過ぎない、其次は北米合衆國の百三十四年、和蘭の百餘年で、其他のものは概して百年以内である、我國の二千五百八十六年に對しては全然比儔の資格を認め難い、且つ我國の建國は此等の諸國の其の如く、單に政治的意義を有するに過ぎないものとは大に趣を異にし寧ろ社會的國家的民族的且つ歴史的に頗る重大なる意義を有するものであるから、吾々國民は大に之を慶び祝ふ可きであり、且つ此の紀元による

日附を重要視しなければならぬと信するのであるが、私は尙ほ我國の建國紀元に關して左の各項につき其の善美尊嚴なることを宣明したいと思ふものである。

一、二月十一日と云ふ季節が建國紀元として甚だ適良であると云ふこと。

二、我國建國の國體々制が善美であること。

三、建國の理想の善美であること。

四、大日本と云ふ國號の善美なること。

是である。以下其の各項につき所懷を申述べたいと思ふ。

三

二月十一日が紀元節に定められたのは、明治六年であつたかと思ふが、其れは神武天皇が大和の畝傍の橿原の宮に於て、辛酉の年春正月庚辰朔日に即位し給ふた其の日を太陰曆から太陽曆に換算して、丁度二月十一日に當ると云ふことから、斯く定められたのである。されば太陰曆に於ける一年の曆日元始の日に、我が建國の紀元も定められたのであつて、建國の始めが恰も其の年の始めであつたと云ふことで、何事を始むるにも最も適當の日に於て其れが始まつて居る

のである。又季節の上から考ふれば、立春より數日の後で、易で謂へば地天泰と云ふ象であり、陽氣既に動いて、萬物増益伸長の候に向つた時であつて、發生建立には最も適當して居るのである。此の時に於て、天壤無窮の皇運寶祚を中心とする國家の基礎が定められたと云ふとは、其の意義實に深遠無限であると云はねばならぬ。凡そ春は四季の首であり、萬物生々の氣に満ちて居る時であるが、然し其れも實は仲春晚春になると、陽が餘りに盛大で、稍や生動浮揚の氣が勝つて深奥嚴肅に基礎發程を定むるには適しない。さらばと云ふて、夏になれば、一層陽動の氣が亢進して、爭亂の機さへ藏されて居るので、堂々蕩々無窮發展の基礎を定むるなどには、甚だ不適當である。放伐抗爭革命などは、得て此の夏季に起り易いのである。前にも舉げた通り、米國の獨立祭の七月四日を始めとし、革命獨立による國祭日には、晩春から初秋にかけてのものが多いのを見て、其の一斑は之を推すことが出来る。然るに秋收冬藏と昔から言はれて居る通り、秋は稠落收穫の時であり、冬は包藏養力の時で、物も人も皆な内へ籠りて身を保ち力を養ふて、陽氣の來復を待つて居る時であるから、無論事物の元始には適しない。冬至は其の絶頂であつて、陰氣の極つた時であり、北半球に於ては太陽が最

も遠く南へ行つて了ふのであるが、其の翌日から其れが北に還り始め、天地の間に陽氣が微かに萌し始める。古來東西諸民族間に、冬至に太陽を祭る風俗を有するものゝ少くないのは此れが爲で、西洋のクリスマスの如きも、實は此の冬至の太陽祭に耶蘇の降誕を配同したる結果、十二月の廿五日に定められたとの一説があるのであるが、萬物増益伸長の第一歩は、實に此の時にあるのである。即ち陰の終極は陽の元始であるから、此の意味からは、事物の眞の始まりは此時に定む可き意義があるのである。然し陽氣が微かに動き始めた丈で、未だ渾沌として居るのである。恰も人が母の胎内に受胎したと同様で、發生の萌は生じて居るが、其より一定の懷胎期を経て出生しなければ、天地の間に勇ましき呱呱の聲をあぐるには至らない。我國の建國の前史にも、恰も是と同様なる懷胎期があつたのである。即ち神代史が其れである。此の時代が一年の季節にする、冬至から立春迄の間に當るのであつて、神武天皇の東征が、丁度其の立春の頃に配當し、其れから數日を経て増益伸長の陽氣が更に幾分發達した時季に、箕都即位が行はれたと云ふのは、時候の氣運の進展と、國家の懷胎誕生と、極めてよく配當せられて居るのであつて、二月の十一日を建國の紀元節とすると云ふ事は、

實に適良此上もない次第であると謂はねばならぬのである。又氣候の上から云ふても、嚴寒の時期が既に過ぎて、氣溫も幾分やわらいで來、霜雪を凌いで萬花に魁する梅花が開蕾して、馥郁たる芳香を放ち、其の剛壯清節、君子の風あるのも、亦た極めて我國風の高貴卓越せる點に好個の對照を示すものであつて、恰も天地情ありて、我皇國の建國紀念の日を慶祝するが爲めに、此の花を咲かしめ此の芳を發せしむるものにあらずやと感せしむるものがあるのである。

四

斯くの如き絶好の季節に於て、吾々は年々吾が建國の紀念日を慶祝するを得ることは、洵に難有く忝なきことであるが、而も其の日に於て祝ふ所の國其者の實質、換言すれば國體は如何であるかと云ふに、是は又た、實に畏つたものであると言はふか、忝ないと言はふか、いやいや、言葉や文字では到底も讚美し盡せない超絶無比、善を盡し美を極めたものであるのである。世界には大國あり、強國あり、富國あり、美國がある。即ち一千萬方哩の領土と、四億七千萬民を支配して居る大英帝國を始め、新進の富強を誇る米國、近世文化の粹は吾にありと任ずる佛國、東洋文化の淵叢にして老大無比を以て自ら居る支那を始め、尙は多くの特質

長所を有する國があつて、我國を以て此等の諸國と對比すると、其の領土は小さく、物資は乏しく、各般の施設に於てまだ及ばざる所甚だ少くないが、國體の點に於ては、實に世界第一である。最善最美である。倫敦が世界第一の大都會であるとか、紐育のウルウオスビルデングが世界最高の建築であるとか、巴里が華美であるとか云ふことは抑も未である。人間にして見ても、鼻が高いとか、目が大きいとか、色が白いとか、血色がよいとか、骨格が偉大であるとか、又は辯が能いとか、或は技術が巧であるとか云ふても、其の人の心性人格が善美でないと思へば、敢て言ふに足らないではないか、我國々體の善美なるは、人にして恰も心性人格の善美であるのと同様で、他の諸國の如く、其の外形枝葉の良好なるなどは、段違ひの高貴のものである。我國が假令何の點に於ても世界第一を誇る可きものを有つて居なくとも、其の國體が絶對最上である以上は、彼等の國に比して價值高きこと百千萬倍である。洵に比倫を絶して居る。今其の所以を少しく詳説して見ようと思ふ。

我國國體の絶對最上なることを明瞭に理解するには、先づ凡そ國體の種別を明かにすることが必要である。而して國體の種別は、學者によりてさまざまの

名稱を付して之を分つが、私の考では、是を次の四種に分つのが最も適當であると信ずる、即ち

一、皇道の國體

二、王道の國體

三、霸道の國體

四、民道の國體

是である。而して我大日本帝國の國體は、右の第一なる皇道の國體であつて、世界には他に此の國體に屬するものは一國もない。皆第二以下の何れかに屬するものである。即ち支那の堯舜二帝から夏殷周の三代は、第二の王道の國體に屬するもので、漢唐以下清代等にも儒學思想に基きて國家を經營治平した大帝王の國家には、王道の國體に準ず可きものが無いではない。然るに春秋五霸や戰國諸雄國秦の始皇の帝國、又は西洋の諸王國帝國は、帝國とか王國とか云ふ様な名目は付けられて居るけれども、其の性質は霸道の國體であるのである。第四種たる民道の國家と稱するものは、私が斯く名づけたのであるが、民主共和の國體を指すのである。民主國又は民制國と云ふても宜しいのであるが、前三者

に道的と云ふ文字を付したから之にも民道的國家とした譯であり、又た斯く呼ぶことに甚しき差支がなく、其の性質を表示し得ない事はないと思ふからであるが、之に屬するものは、佛米其他の民主共和國を皆な包含せしめて分類したのである。斯く種別分屬を申せば、更に多言を用ひずして、其の各種の國體の性質は略ぼ推知することが出來ると思ふけれども、然し我國の國體の絶對優越せる所以を明らかにするに最も重要な點であるから、以下此の四種の國體の本質につき一と通りの説明を加へなければならぬ。

五

私が稱して皇道的國體と申す所の我國の國體は、先天自然に人類の結合統制せらる可き基礎に因りて、其の國家體制が構成せられたものであつて、第二以下のものは、皆な後天人爲の基礎に因りたるものである。此の點が最も重要な差別の特點である。先天自然と云ふことは、自然石の如きものであるが、後天人爲は人造石の如きものである。前者が水晶であれば、後者は硝子である。即ち皇道の國體に於ては、其國家は家族から自然に擴張發達したものである。國民の關係は、親子の關係、其儘のものゝ伸長したものであり、國民同志の關係は、夫婦

兄弟の關係の擴大したものである。其の結合は自然の人情の至美至純なる、親子愛夫婦愛、兄弟愛を基礎とするものであり、其の統制は、本末宗支の自然的秩序を根蒂として居るものである。即ち我國統治の大權は、天神の嫡統本宗たる萬世一系の天皇が之を總攬し給ふ所で、此の大權の所在は、何等後天の基礎條件で定まつたものでなく、天地開闢と同時に成りませる天神から傳統せられたものである。天照大神が皇孫瓊々杵尊を此の土に下し給ふ時の大詔にも、天地六合を貫き徹す斷定の御言葉を以て、豐葦原の千五百秋の瑞穗の國は、是れ吾子孫の王たる可き地なり、爾皇孫就て治む可し焉と宣らせられてある。又明治二十二年二月十一日の明治天皇の憲法發布の勅語にも、國家統治の大權は朕が祖宗に承けて之を子孫に傳ふる所なりとあり、今上天皇御即位當紫宸殿之儀の勅語にも、朕惟ふに皇祖皇宗國を肇め基を建て列聖統を紹き裕を垂れ天壤無窮の神勅に依りて萬世一系の帝位を傳へ神器を奉して八洲に臨み皇化を宣へて蒼生を撫す爾臣民世々相繼ぎ忠實公に奉ず義は則ち君臣にして情は猶ほ父子の如く以て萬邦無比の國體を成せりとある。皇祖皇宗は日本民族を以て組織する一大族制國家の嫡統本宗である。其の本宗が支族を統治するのである。父祖

が子孫眷屬を統すると同様である。父が子を率ひ、兄が弟妹に長となり、宗家が支族を主宰するは自然的秩序であり、又た一度父子となりたる以上は、如何なる基礎條件を以てするも、子を父とし、父を子とすることは出来ない。兄弟宗支も亦た斯くの如くであつて、其の地位關係は先天の秩序により定まつたものであつて、一度定まつた以上は永劫不變である、後天の何者を以てするも之を如何ともすることは出来ないのである。是が天地自然の秩序であるから。此の天地自然の秩序が破れ亂れる時が来るにあらざれば、變易を加ふことは出来ないのである。我國の皇極、即ち、天皇統治の大權の基礎は、斯かる天地自然の秩序を原理として定まつたものであるから、天地自然其者と共存するものであつて、此の天地、此の自然が存続する限り、恒常不易である、永劫不變である、絶對神聖である、あらゆる後天の基礎を以ても代替することが出来ない。あらゆる人間の條件を以ても競争することが出来ない。我國の統制の原理は自然の秩序を基礎とするものである。是れ皇道の皇道たる所以であるのである。而して斯くの如き國體を有する國は、世界に於て我國のみあつて他に又とないのである。二月十一日は斯かる神聖無二の皇國が國として建設せられたることを記念する

所の建國の祝祭日であり、紀元の佳節であるのである。

因に我國を神國と云ふのは、天皇は天神の直系子孫であらせられ、國民は天神の枝葉末孫であるからであるのみならず、其の結合統制の基礎原理が、先天絶對神聖なるものであると云ふ點からも、斯く名づけて差支なからうと思はれる。

神國など云ふ時は、一見神祕的であつて、非理智的の如く聞ゆるけれども、あらゆる他の國は、後天人間の基礎條件によりて成り立て居るのに、獨り我國のみが、先天の事實秩序によりて結合統制せられて居る點から見れば、通俗に之を神聖の國と稱し、神國と呼ぶも強ち不適當でないではないか。尙ほ我國は結合の基礎が血縁であり、統制の原理が血系の宗支によると云ふ點から、血に由る國と云ふてよい理由があると信するのであるが、血と云ふ時は、世人は一途に悽慘殺伐の感を懷く様な傾向がありはせぬかと思はれる點から、一般の呼稱としては或は適當でないかも知れぬが、事の本質上からは、寧ろ適當であると考へるのである。蓋し智とか、徳とか、力とか云ふ様なものも、皆な其の本源は血にあるのであるから、後段に於て王道國家を「徳」による國、霸道國家を「力」による國と稱するに對して、皇道國家を「血」に由る國と稱するは頗る當然であり、且つ尊貴す可き名であるの

である。故に私は此の意義から、皇道國家を「血に因る國」と云ふ名で説明することも敢て差支ないと信ずるものである。

六

然るに王道的國家と稱するものは、之に反して、最大聰明仁德者が、天帝の子たることを擬制して天子と稱し、民の父母たる天地の德を代表して、自ら民の父母たるの地位に即き、『尙書』洪範の所謂「天子作民父母、以爲天下王」とある如く、民の父母たるの仁德政治を行ふと云ふ、後天的の條件によりて、以て天下の王、即ち統治大權の總攬者となるのである。稱して天子と云ふけれども、實際の天帝の子にはあらずして、天帝の子たるに擬するものであるから、擬制天子である。眞に血統上天神の直系たる吾皇統とは、比較にも何にもならぬものである。支那中原に並立散在せる數多の姓族氏族中の何れか有力なる或る一族中より興りたるものに過ぎない。元來の身分上に於ては、彼と同等なるものは多數に存在するのであつて、其の血統や身分によりては、何等他姓の上に立ちて之を統制するに足る基礎を有するものではないのである。競争の結果他に對して優秀有力であつたに過ぎないのである。只だ其の競争が、武力や資力等の如きに依れる

ものではなくして、仁徳が最も宏大であることによるものである。即ち堯が其の仁天の如く、其の智神の如くであつたと云ふ様な事や、舜が濬哲文明、玄德升聞したと云ふ様な事によりて、民の父母たるに足るとせられ、天命を受けて帝位に即き、或は商の湯王や周の武王の如く、前朝の君主が暴虐にして民の父母たるの徳がないから、天の明命に基づいて之を放伐して、代りて民に仁徳を行ふことを條件として天下に王たるものであつて、其基礎條件共に架空であり人爲のもので、先天絶對のものではないのである。即ち王道的國家には、禪讓放伐は到底之を避くることが出来ぬ。其は統治權の所在が、先天絶對の基礎に置かれて居らない當然の結果である。夫れ、人によりて定められたることは、又た人によりて破られる。己れ自ら天の子に擬して天子と稱すれば、他の者が出でて還た自ら天の子なりと名乗ることを如何ともすることは出来ぬ。己れは實に天の明命を受けたる者であると號したりとて、他も亦た、自ら號して吾は受命の君なりと言ふの自由がある以上は、其の特權は永遠不變のものでもなければ、恒常不易のものでもなく、況んや絶對神聖のものではないのである。堯舜三代の聖世に於てすら、禪讓が行はれ、放伐が是認せられなければならなかつたのは、是が爲めであ

る。況んや後世に至りては多く言ふを俟たない。廿餘朝の易姓革命が行はれなければならなかつたのも當然である。儒書の説に囚はるゝものは、動もすれば禪讓放伐の禍害を等閑視せんとするものがあるが、是れ甚だ迂濶な次第であつて、實に甚だ恐る可きものがあるのである。又た放伐の慘禍を認むるものも、禪讓の意義を非とせず、却て或る意味に於て之を讚美するが如きものさへあるのであるが、其は極めて危険なことであり、大に誤れる考へである。國家至上の實位、至高の大權は、絶對神聖でなければならぬものである。恒久不易でなければならぬものである。天下の如何なる事情によりても、何人の力を以てするも、之を動かす可きものではないのである。假令堯舜の濬聖を以てするも、敢て之を授受なごす可きものではないのである。況んや、或は智を以て、或は力を以て、又は財を以て、之を玩弄爭奪す可き譯のものではないのである。之をなせば、絶對は汚される、神聖は辱められる、至上は至上を失ふことになる、至高は至高ではなくなるからである。此の意味に於て、支那王道の聖王として、萬世の模範とせらるゝ堯舜禹湯文武の王位帝權と雖も、至上を失つて居る、至高でなくなつて居る、絶對神聖は汚辱せられて居る。只だ獨り我が皇國の皇位皇權のみが、

東西古今に互りて、至上は眞の至上であり、至高は眞の至高であり、絶對神聖は眞の絶對神聖を保持して居るのである。是れ皇道の國體とは王道的國體以下のものとの、全然比倫す可からざる差別點であるのである。嗚呼吾々大日本皇國民は、何と忝ないことではないか、何と難有いことではないか。世界にありとあらゆる感激の言葉を連ぬるも、斯の萬國無比の國體を特有する吾々國民の光榮と幸福とは、之を言ひ表はすことは出來ないのである。堯舜の民と雖も此の光榮を荷ひ此の幸福を享有することは出來ないのである。

七

第三の霸道的國體と云ふものは然らば如何なるものであるかと云ふに、是は又た甚だ殺風景な性質を有するものであつて、力を以て王權の基礎とするものであり、強制を以て統制の方法とするものである。統治者は始めから人中の梟雄であつて、天帝の子と號することもなく、仁德を以て立脚地とすることもなく、財を聚め、兵を練つて、權勢を盛にし、征服強壓を以て、弱者劣者を支配し、命令を聽かず支配を拒むものに對しては、嚴厲なる法と刑との威を以てし、尙ほ服せざるものには、鐵と火とを以て臨むものである。支配者と被支配者との間には、立場

と利害の相反するものはあるけれども、共通一貫の歸趣理想は無い。支配者は被支配者を搾取することを以て己れの利益とし特權とする、一方被支配者は支配者の搾取を出来るだけ輕減せんが爲めにあらゆる手段を盡して其の力を傾ける。洵に淺ましい目的態度を有する二つの階級が、常に抗爭の關係に於て國家的統制を行ふて居るのである。斯かる國家には、常に反亂革命の危機が包藏せられて居つて、上からの壓力が少し緩めば、直ぐに反撥せんとして居る。故に支配階級は出来るだけ、武力や警察力を以て、被支配者を制壓し、法令を嚴にし、刑辟を酷にして、手も足も出ない様に仕向ける。然し、ゴムマリが壓縮すればする程、其の反撥力が強くなる様に、被支配者の反抗心は、益々強烈となつて來て、危機は彌逼つて來る。斯くして遂に爆發紛亂するに至るのである。秦の始皇の絶大なる帝國も、斯くして顛覆滅亡した。佛蘭西革命も、斯の如き結果から行はれたのである。露西亞のロマノフ王朝の覆滅したのも、是が爲めである。亞米利加合衆國が、英國の殖民地の地位から反抗獨立したのも、同様の筋道を行つたものである。是れ然し寧ろ當然のことである。孟子は曾て王霸の別を矢ヶ間しく論じて、王道を讚美し霸道を排撃したのであるが、其の讚美せらるゝ王道を以

てすら、禪讓放伐を免るゝことが出來ぬのであるから、況んや霸道的國家に、抗爭革命が勃發するのは當然であらう。力(廣い意味の)を以て君權の基礎とするのが霸道であるから、特に反抗、競争の起る機會が多い譯である。それが爲めに、國家なり、社會なりには、活氣が生じ、進歩を見ることもあるが、人皆な自ら爭心が盛になつて、秩序を輕んずるやうになり、或は下が上を剋し、或は徒黨を組みて相軋すると云ふ風になつて、社會はさながら修羅界を見る様な傾向状態になつて來るのである。王と諸侯との抗爭、貴族と平民との對抗、資本主と勞働者との闘争、地主と小作人との衝突等の、頻々として起るのは、蓋し斯の如く、力の強弱を以て、支配階級と被支配階級とを分ける標準とし、權と法とを以て、國家を統制する所の霸道の精神から、當然現はれ來る副産的の社會現象であると云はねばならぬのである。無論王道の國家でも、皇道の國家でも、其の國民の心から、全然爭心を排除撲滅し盡すことは出來る筈はないけれども、概して前者に於ては、秩序を貴び、仁愛を好み、自ら抗爭より遠ざかり、霸道的國家に於けるが如きと其の趣を同ふせぬことは、歴史上の事實に於て見るも、充分之を認め得るのである。

我國に於ては、過去半世紀間に於て、歐米の霸道的、又は民道の國體の國家社會

に發達したる學問思想が、慎重なる批判選擇の遑もなく、蕩々として輸入せられ、從て其の抗爭的精神迄も、傳染摸倣せられたるかの感が甚だ多く、歐洲大戰爭後、特に階級的鬭爭の現象が顯著となつて來たのである。吾人は之を以て一時的なる外來の影響であつて、我國民が、其の本來の皇道的國體の精神に、驟然覺醒するに至つたならば、彼の霸道的國家に實現せらるゝ狀態とは、餘程其の趣を異にしたる現象を見るに至るであらうと考へて居るものである。如何に善美にして高貴なる國體を有つて居つても、其の國體觀念が國民の間に弛緩遺忘せらるゝに至れば、其の虛に乘じて、之に不似合の思想主義も侵入跋扈するに至るの虞があるから、常に其の國民に之を普及徹底し、且つ之を緊張せしむることが極めて必要である。而して此の皇道的國體の觀念が、國民一般に徹底的に了得せらるゝに至らば、我國に於ける資本主對勞働者の問題も、地主對小作人の問題も、其他此等階級鬭爭的の諸種の社會問題も、自ら霸道國や民道國に於けるものとは、異なれる趣を呈するに至る可く、其が解決にも、當然皇道的大精神に基いた所の、適切な政策が發見せらるゝことであらうと思ふのである。何となれば、國體觀念其者が、其の國民の國家思想の原理であり、國民的信念の本據であるから、其の

原理、其の信念が普及し徹底すればする程、其は同時に、社會的原理、社會的信念となつて、現れ来る可き筈であるからである。霸道的國家に起る社會問題の性質が、皆な共に強烈なる霸道的性質を以て現れて來て居るのを見て、其の有力なる反證であると思ふ。斯く考へ來れば、我國に於ける所謂危險思想の問題も、過激運動の問題も畢竟するに吾皇道の國體觀念の大精神が、未だ充分に普及徹底せないが爲めに發生し來るのであるから、斯かる思想や運動の排除撲滅には、何等他の方策を用ふるに及ばない。唯管ら、此の絶對神聖なる國體觀念を國民の間に普遍徹底せしめ、以て之を牢乎として動搖す可からざる國民的信念たらしむるに至れば、是に反する社會的思想や運動は、自ら其の存在の餘地がない様になるに相違ないと信ずるのである。

八

第四は民道の國體であるが、是は普通に民主的國體と呼ばれるものであり、或は之を民制的と謂ふても差支なからうと思ふのであるが、前三者と對照上道の字を用ひて之にも民道的と名付けたのである。而して是は佛蘭西、露西亞、獨逸の如き、曾て代表的の霸道的國家たりしものが、革命せられて出來たものか、又は

米國の如く或る國家の霸道的政策に反抗して、其の屬領殖民地が獨立して建設したものであるから、謂はば、霸道的國家の弊害が、愈々行き詰まつた上げ句に更生したものと云ふてよいであらう。要するに國家統治の主權が、人民全體にありとするものである。所謂天下は一人の天下にあらず、天下は天下の天下なりと云ふ思想に近いもので、理想上から謂へば、力の強いものが、其の弱い者を支配する霸道や、自ら民の父母たるの仁徳ありと任じて、以て王位を専らにする王道などに比して、餘程差し障りが少い様ではあるが、然し實際上に於て、國民全體にある主權を如何にして行使するか、國民全體が全體として實際上の主權を行使することなどが出来るものではない。どうしても大統領と云ふ様な機關を置いて主權の實際的行使に當らしめなければならぬ。而して其の大統領を定めるには、一般に選舉と云ふ方法によるのであるが、是が又た結局一種の競争によりて定まるものであり、従て國民の爭心を煽揚するものである。加之選舉なるものは、數の多少によりて決せられるもので、其の質を考慮する方法が無視せられて居る限り、當選の結果なるものは、數量上の測度たるに止まるもので、價值上の決定ではないから、所謂人盛なれば天に勝つと云ふ様な場合が、少なからずあ

り得ることを覺悟しなければならぬものであつて、到底之に絶對神聖などを期待することは出来ないものである。斯かる基礎の上に立つものを、元首とするのが民道的國體であるから、先天絶對の基礎に、主權の所在の定まつて居る、皇道的國體の高貴神聖なるには、比較するに足らないことは、又た多く言ふを俟たない。

上來述ぶる所の如く、我が國の國體は、世界唯一の皇道的國體であつて、而して此の國體は、他の三種の國體の何れに比するも、超越優良なるものであり、所謂絶倫無比至善至美のものであるから、其の建國の紀念日も亦、非常に重大なる意義ありと云ふ可く、從て我國の國民たるものは、宜しく滿腔の誠意熱情を以て之を慶び祝はねばならぬ次第である。

九

右の如く、我國の國體は、至善至美であるのであるが、更に其の建國の理想の至高至大にして、雄偉莊嚴なること、又た實に言語に絶するのである。

天孫の降臨に當り 天祖天照大神の神勅には

葦原千五百秋之瑞穗國是 吾子孫可王之地也。 宜爾皇孫就而治焉行矣。 寶

アカウミノフキミタルベキクニ

ヨロシクイマシヌノミマユイナシラセサキク

アハツ

祚之隆當與天壤無窮矣

とある。此の大精神によりて我國は肇められたのである。

又 神武天皇が畝傍山の東南、橿原の地に帝宅を經始せられんとするに當り己未年三月辛酉朔丁卯日令を下してのたまわく、

(上略)

當披山林經營宮室而恭臨寶位以鎮元元上則答乾靈授國之德
下則弘弘皇孫養正之心然後兼六合以開都掩八紘而爲宇不亦可乎

とある。斯くの如き大理想に基きて我國は建てられたのである。此の二大詔に我が皇國建國の大理想大精神は炳乎として顯れて居るのである。尙ほ天祖より天孫に授け玉へる三種の神器も亦た天下治平の大道を象徵するものである。藤原親房卿も、『神皇正統記』に、三種の神器世に傳ふ事、日月星の天に在るに同じ、鏡は日の體なり、玉は月の精なり、劔は星の氣なり、深き習ある可きにやと云ひ、又たこの三種につきたる神勅は、まさしく國を手持ちます可き道なる可し、鏡は一物をたくはへず、私の心もなくして、萬象を照すに是非善惡の姿あらわれずと云ふ事なし、その姿に従ひて感應するを德とす、これ正直の本源なり。玉は

柔和善順を徳とす、慈悲の本源なり。劔は剛利決斷を徳とす、智恵の本源なり」と謂ひ、或は之を智仁勇の三徳に配す、實に君主の三大徳を代表するものであつて、事甚だ重しと雖も、最根本的な建國の大理想大精神に至りては、宜しく之を前記二大詔に求む可きである。今天祖の大詔を拜し奉るに、天日嗣の隆盛ならんこと、天地と與に窮りなかる可しと仰せられてある。寶祚の無窮は詳しく申せば、皇運と國運との不二なる我國體に於ては、皇室中心の大日本皇國の生命が、無限の時間に互りて彌榮えに榮ゆると云ふことである。發展興隆生々無息にして、窮極が無いと云ふことである。是は主として時間にかけた意味になつて居るが、神武天皇の大詔には、六合を兼ね八紘を掩ふて宇(家)となすとあつて、之は主として空間にかけた意味が表れて居り、宇宙統一の宏謨であるから、此の二大詔の精神は、無限の時間無際の空間に互りて、我皇國は彌榮えに榮ゆると云ふ意味になるのである。何と高遠偉大ではないか、否々、高遠偉大と云ふ形容をも超絶して居る。人間にありとあらゆる驚嘆讚美の言葉を積集連續するも、此の我が建國の大理想大精神を讚美驚嘆する言葉としては何の役にも立たない。茲に至りては人間の言葉と云ふものも洵に憐れむ可きものである。斯かる大精神

が、即ち我國建國の理想であるのである。古今東西何れの國が斯かる大理想を以て國を建てたるか。而して此の建國の理想は、其以來直ちに我國の信念であり、而して今日に至る迄、明確なる事實として顯現して來て居り、而して現在の我國の國家的信念は、即ち建國の理想其者である。明治廿二年二月十一日に明治天皇の發し給へる憲法發布の勅語に「益我が帝國の光榮を中外に宣揚し祖宗の遺業を永久に鞏固ならしむるの希望を同じくし」とあり、廿三年十月三十日の教育勅語には「以て天壤無窮の皇運を扶翼す可し」とある。是れ今日の大日本帝國の國家的信念であり、國民的精神であつて、而して建國の理想の發揮顯彰に外ならぬものであることは、頗る明々白々である。斯かる至高絶大なる理想を其の建國の理想とし、且つ現在國家生活の信念精神とする處の吾々皇國の臣民や、實に幸福なる國民である。

因に、曩にも云ふた通り、我國の國としての誕生は神武天皇即位の時にありとするけれども、國家生成の萌芽、換言すれば、國の懷胎は神代にある、故に詳しく言へば神代史全部の中に、我國肇造の精神理想が求められなければならないのであるが、中に就き天孫降臨の際に天祖の授け給ひる大詔に於て最も其の精粹が

發揮せられて居ると見らるゝのであるから、其れど、愈我國が國として生れ出づるに當りての宣言理想と見る可き、前記神武天皇の大詔を通して、我國建國の大理想大精神を窺ひ奉つた次第である。此點は茲に一言註釋を加へて置く次第である。

十

次に吾々は「大日本」と云ふ我國の國號の極めて善美なることを讚美せざるを得ない。天祖天照大神は、別號を大日靈貴尊ヒルメミチと申した、又た一書には天照大日靈尊と云ひ、太陽を以て象徴せられ給ふ所の神であつて、此神を吾々は皇祖とも國祖とも仰ぎ奉り、皇位は天照大神の御位の繼續で、之を天日嗣と稱へ、古來男子を日子ヒコ、女子を日女ヒメメと謂ひ、皆な太陽の子孫末裔であるとして居るのであるから、其の國を「太陽の國」、「日の國」即ち日本と號することは當然である。尤も上古は、やまと、と稱して居つたが、漢字の傳はるや、大日本又は日本と書いて、やまと、と讀ませることになつて居る。大日本と書いた古い例は、大日本ヤマト豊秋津州トヨアキツスと云ふを始め、懿德孝靈、孝元三天皇の御諡に、皆な大日本の字あり、垂仁天皇の皇女に、大日本姫あり、何れも國名から來たのであらう。日本と書いた例は、虚空見日本ソラミツヤマトの國の

名があり、又た神武天皇の御名を、神日本磐余彦と號し、孝安天皇を日本足開化天皇を稚日本、景行天皇の御子小碓ノ皇子を、日本武ノ尊と名付け奉れるなどは、矢張國名から取つたのである。之を要するに、太陽を象徵して國名が出来たのであるが、而も其が如何にも國の成り立ちと共に自然に出来て居るのであつて、名の爲めに名を付けたと云ふ様なことは毫もなく、名實極めてよく相應じてゐるのである。今日世界の主要なる國の名を見るに、英國 England は、アングロ人 (Angles) の地と云ふ意味から起つて居り、United States of America の America は、伊太利の航海者たる Amerigo Vesputci と云ふ人名から發して居り、France 卽ち Frank は、其の民族特用の兵器の名から來たと云ふことである。支那には各王朝の國號は種々あるが、多くは其の興起したる土地の山河、其の他の地物の名、又は氏族名などから來て居り、古今に通じたる名としての中華又は中國は、天下卽ち地上の中央にある文華の國であると云ふ誇稱から起つたのであつて、比較的堂々たる名號であるが、我大日本と云ふ名は、全く超群逸格のものであつて、光輝赫灼として、永恒に亙り宇宙萬物を照耀する天上の太陽こそは、天壤無窮に、六合を兼ね、八紘を掩ふ所の精神を以て國を建てたる、我日本國と極めて好對應を有して居るの

である。吾々は國體と理想とを讚美したと同一の驚嘆感激を以て、此の國號を讚美す可きである。吾々は日々太陽を仰ぐ毎に、其處に天祖天照大神の面影と、建國の理想精神と、國名の由て來る本源を、具象に認めて無限の歡喜と感激とを覺ゆるを禁ずることが出來ないのである。

尙ほ茲に一言卑見を申述べて置きたい事は、是迄我國を大日本帝國と稱して來たのであるが、私は是を大日本皇國と稱することゝ致し度いと思ふのである、上來論述する通り、我國は世界唯一の皇道國體の國であるから、之を大日本皇國と云ふ方が、當然であり必要である、のみならず、帝國と云ふと帝國主義などゝ云ふ語と錯雜し誤解せられ易くてよろしくない。我大日本は帝國主義エンペリアリズムの國ではない、そんなものとは比較にならぬ高尚遠大な主義思想を有して居る國である、故に若し主義として名づくるにしても、是を皇國主義と號すべく、帝國主義などと呼ぶ可きではない。又た、常に大の字を附けて、大日本皇國と稱することに致したい、是が、吾々國民の自覺であり、信念であり、抱負でなければならぬ。而して吾々は自國を斯く呼ぶ毎に、自國が王道國にあらず、霸道國にあらず、民道國にあらずして先天絶對の皇道國體を獨有する大國民なる事の自

覺自信を高かめることが出來、而して其自覺自信が、其の事實を恒常永遠ならしむる所以であるからである。

十一

斯くの如く、我國の建國紀念日たる二月十一日は、季節の上に於て最も建國に適良であり、而して其の日に建てられたる國の本質、即ち國體、其の建國の理想、而して其の國號が、皆な善美高大を極めて居り、絶對至上であること、茲に曉然たるものがあるに於ては、我國民たる者、一人として此の日を紀念して慶び祝はない者はあり得ぬであらう。宜なり、此の日を三大國祭日の一たる紀元節とし、尙ほ且つ建國祭を催して其の歡喜感激の表現宣示を行ふことや。是洵に當然の事である。

然し、吾々は是を考へねばならぬ。是迄毎年慶び祝ふて來た紀元節としての仕來り丈けでは物足らぬとして、或る一部の人士が、是非とも茲に建國祭を行はねばならぬと強く固く決心して起たねばならなかつたのに、餘程の理由があつたのではなからうかを。我國民中の或部分のものは、我皇道の眞味を何時の間にか忘却して、霸道又は民道の餘臭に惑はされて居りはせないか。我建國の大

精神大理想に覺醒しないで、歐米思想の魔酔に迷夢を食つては居りはせないか。外來の文物制度思想智識も、我大日本皇國の大生命を養ふ食物とし、其の體軀を裝ふ衣服とするに於ては、別に差支はない。大日本と云ふ大木を繁茂せしむる肥料として之を採用することは、甚だ結構であるが、衣食はどこまでも衣食であり、肥料はどこまでも肥料であることを忘れてはならぬ。皇道の國體と建國の理想とは、其の生命であり、心性である。之を覺醒し之を振興しなければ、衣食倒れとなつて健康を損傷し、肥料の爲めに毒せられて枯凋するの虞がある。建國祭を企てたる人士の胸裏深く此の憂を懷て居るのではなからうか、吾人の縷々として微言を陳する所以も亦た是に外ならぬのである。

（大正十五年二月二十五日午後三時稿）